

研究動向

子育てにおける夫婦関係に関する研究の動向

森 友里奈

目次

- ・はじめに
- ・子育てにおける夫婦関係について
- 1．ワーク・ライフ・バランス
- 2．夫婦のコミュニケーション・相互性
- 3．夫婦間の満足度
- ・おわりに

・はじめに

近年、わが国の家族を取り巻く環境が大きく変化し、経済状態の不安定による経済格差、女性の就労状況、核家族化、急激な少子化など、その内容は様々である。特に子どもを持つ家庭の子育て環境は、常に影響を受け続けている。¹⁾核家族化の進行による母親の孤立化、育児不安や児童虐待等が社会問題化して、社会的な関心の高まりとなっている現代においては、父親も育児には無関心ではいられない実情にある。ワーク・ライフ・バランスの観点で言えば、²⁾2006年の家庭教育に関する国際比較調査では「日本の父親が平日に子どもと一緒に過ごす時間は平均3.1時間しかなく、また育児を分担する割合も低かった。一方、子どもと接する時間が短いことに悩む父親も4割おり、忙しい中で子育てに参加したい父親が増えている。」という報告がなされ、父親の育児参加を促す必要性が指摘されている。こうした現状から、育児において夫婦間の協力や連携は欠かせないものであると言えるが、わが国では、夫婦双方の育児に同時に焦点をあてた研究はわずかである。ここでは、先行研究によって明らかにされた子育てにおける夫婦関係を整理し、今後の夫婦の協同育児の検討・改善に役立つ研究動向を示す。

・子育てにおける夫婦関係について

1．ワーク・ライフ・バランス

仕事に携わる男女に関わる問題として、仕事と家庭生活をバランスよく送り、その中で精神的にゆとりを保つと同時に、人間らしく生きようとする考えが進む中で、ワーク・ライフ・バランスが提唱され始めた。これは、仕事へ従事する一方で、家族や夫婦でのゆとりある関わり、地域との関わりに従事するなど家庭を中心とする生活領域での充実した生活を送りながら、仕事と家庭生活への関わりを両立する姿勢を示している¹⁾⁹⁾。

木田³⁾が、私立保育園に子どもを通園させている、妻が雇用労働者の核家族夫婦82組を対象に調査した結果、妻が常勤である家庭の夫と妻の方が、妻がパートである家庭の夫と妻に比べて、相手がよく理解してくれていると思っている人が多いことが明らかになった。特に常勤の妻にそのような認識が多いことが示された。また、集団としての特徴だけでなく、一組の夫婦におけるお互いの理解を問題にする必要があるという観点から、夫と妻の「理解」の関係を調べると、パート群の夫婦の役半分は、夫婦がともに相手からあまり理解されていないとっており、常勤群においてはそのような夫婦が約三分の一と少ないという結果が示された。また、ここでいう「理解」とは「自分という人間に対する相手の理解」を意味している。そして、相手から相互によく理解されていると思っている夫婦は、互いに相手から少ししか理解されていないとと思っている夫婦より、明らかに各生活領域(家事・育児・余暇・意思決定・コミュニケーション)の共同が高く、この傾向は特に常勤群

に顕著に見られた。ただし、常勤群の場合は育児領域については妥当しなかった。このことから、夫婦間の理解と生活の共同は密接な関係があることが示唆された。常勤群の育児領域が該当しなかったのは、夫婦間の理解の度合いに関わらず、生活の中で共同すべき内容として双方が認識している傾向があるためと考えられる。

青木⁴⁾が、東京都内の保育園に通う3、4、5歳児学年の幼児を持つ父母185組を対象に、協同育児に関わる要因の男女比較の調査をした結果では、「配偶者からの育児の相談や調整の期待」には夫婦間に正の相関が見られたことから、協同育児は、夫と妻、どちらか一方が相手の要求に合わせるのではなく、双方が育児を夫婦の協同行為として捉えることで実現することが示された。さらに、共働き夫婦が育児を行うためには、職場が育児を支援しているという雰囲気を感じられることが欠かせないことも確認された。男女共同参画社会を目指す中で、政府や企業等により育児支援の制度の整備が実施されてはいるものの、実際にそれらを活用した事例は多くなく、制度自体を活かすためには、制度を利用しやすい雰囲気が感じられ、本人が実感できることが重要であるといえる。

佐藤¹⁸⁾が乳幼児を持つ母親および父親の肯定的な育児感情に基づく育児の協同は何によって支えられているのかを検討することを目的として、保育所に通う乳幼児を持つ父母336組を対象に質問紙調査を実施した。結果では、育児感情については「子ども・子育てへの肯定感」も「子育てへの否定感」も母親の方が父親よりも高く、また「子ども及び自分の独立性の意識」においても母親の方が父親よりも高かった。これまでの先行研究の報告も合わせて考えると、現実として家事や育児に深く関わるのが少ない父親の方が子どもとの関係を抽象的に・観念的に捉えている

ことが一つの要因として挙げられる。さらに、母親の「子育てへの否定感」は父親の育児時間、家事時間と負の相関が見られた。また、「子ども・子育てへの肯定感」が高い父親は家事時間が長く、余暇時間が短い結果となり、「子育てへの否定感」が高い父親は家事時間が短いことが明らかになった。

尾形¹⁹⁾が、大学生・大学院生338名を対象に質問紙調査を行い、共働き家庭の父親のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係に与える影響について調査した。分析する際に、父親のワーク・ライフ・バランスの指標として、家庭関与と仕事関与の2つの側面から捉え、家庭関与と仕事関与の各々の高低に基づいてHH、HL、LH、LLの4群を形成しそれを基本とした。結果では、夫婦関係満足度との関係について、HH群はLL群よりも有意に高い値を示し、HL群はLH群とLL群の両群よりも有意に高いことが示された。HH、HL両群ともに共通していることは、基本的に父親が家庭関与に高く関わっている点である。よって、良好な夫婦関係を形成するためには、家庭への関与に重点を置いた関わりが必要であることが示された。家族機能は家族成員である子どもの精神発達にも間接的な影響をもたらすことにもなることをさらに合わせてみると、ワーク・ライフ・バランスは生活の送り方を追求するだけではなく、家族成員の精神的状況にまで影響する問題だと捉えることができる。また、父親の家庭関与と仕事関与のバランスが家族成員の生活状況に与える影響に関しては、父親の両関与が高い状況で両立している場合には、夫婦関係を中心とする家族のまとまりが促進されるという結果が示された。よって父親のワーク・ライフ・バランスのあり方は家族成員が家族の中で一緒に過ごす時間と会話時間など、家族のあり方を左右する核の部分に影響するものと考えられる。

このような研究にも示されているように、

ワーク・ライフ・バランスについて考える場合、有職者の男女を別々の一団体に捉えて、予想される身体的、精神的問題や解決を論ずることが多いようである¹⁹⁾が、現実問題としてそれには無理があると思わざるを得ない。個々の家族成員は家族の中のメンバーとして生活しているため、当然お互いの行動や結果に影響を受け合い与え合う。つまり、家族システム論の視点からみた場合、夫婦に焦点を当て夫婦を各々の単位として捉える際に、夫婦の中にも夫(あるいは妻)からの働きかけがあり、それに対する妻(夫)として反応があり、それからさらに相互の行動が継続的に派生し続けていくことになる¹⁹⁾。よって、今日においては母子関係や母親の育児ストレスなどといった、母親が中心となって家事育児をこなしているという前提のもとで研究がなされてきたが、今後は夫の家庭・仕事に対する意識と行動がどのくらい関与しているのかも、母子への影響を考慮して論じていく必要性があると考えられる。

2. 夫婦のコミュニケーション・相互性

溝田⁵⁾が、母親の育児に関する自由記述を通して、夫婦関係と母親の育児態度との関連を見ていくことを目的とし、福岡市内の育児サークルと保育園児の母親 321 名の育児に関する自由記述を元に分析を行った結果、4つのパターンが見出された。夫婦間のコミュニケーション頻度が高く、母親の育児に対して父親の理解があれば、母親は父親の協力に対して感謝し、前向きに育児に向かっていることが分かった。しかし、父親の協力で全てが満足できるわけではなく、自分自身の育児能力に対して不安を持ったり、絶え間なく続く育児の中で、気軽に預けられる相手や一人になれる自分の時間を欲しているということも明らかになった。これとは逆に、夫婦間のコミュニケーション頻度も低く、母親の育

児に対して父親の理解がなければ、母親は父親に対して不満を持つことが示された。また、父親への不満が子どもに向かうこともあり、育児からやや逃避的な態度を示すことになることが分かった。そして夫婦間のコミュニケーションが高く、母親の育児に対して父親の理解がない場合、と類似した傾向を示し、

夫婦間のコミュニケーションが低く、母親の育児に対して父親の理解がある場合は、と類似した傾向を示した。このことから、夫婦間のコミュニケーション頻度以前に、その中に母親の育児に対する父親の理解が深く共有されていることが、夫婦でお互いにプラスの影響を及ぼすための肝要な内容になると考えられる。

溝田ら⁶⁾が上記の研究と同じ対象者で、夫婦間のコミュニケーションと育児不安の関係を調査した結果、「育児負担感・育児束縛感から生じる不安」については、父親とのコミュニケーション頻度が高いほど母親の育児不安は低い傾向にあった。しかし、その他の不安(育児についての不快感情、子どもの成長・発達についての不安、育児能力に対する不安)に関しては、関連は見られなかった。また、上記の研究で類型化した4つの夫婦関係のタイプと母親の育児不安との関連をみたところ、父親とのコミュニケーション頻度よりもむしろ育児行為に対する父親の理解度が母親の育児不安と関連していることが明らかになった。このことから、プラスの影響というのが具体的に母親の育児不安の低下であることが挙げられ、その育児不安の中でも、自分自身の能力や感情、または子ども自身に対する内容ではなく、育児の負担感・束縛感という協同育児に関係する内容が夫婦のコミュニケーションによって緩和されることが明らかになった。

梶浦ら⁷⁾が小学校5、6年生の児童を持つ核家族 307 ケースを対象に、夫婦の相互理解と子どもの両親観・家庭観との関連を調査し

たところ、共働き家族と非共働き家族によってその様相が異なった。非共働き家族では、生活領域のうち「意思決定」における夫婦の共同が、子どもの両親観の肯定的認知と関連した。また、夫婦の相互理解と子どもの両親観・家庭観の肯定的認知とが関連する結果が示された。一方共働き家族では、夫婦の相互理解と子どもの両親観の肯定的認知とが関連していた。このことから、妻の就業形態に関わらず、夫婦の相互理解が子ども自身の感じる両親観に肯定的に影響することが明らかになった。この場合、相互理解とは夫・妻それぞれが相手から理解されているかの認知によって捉えることとする。

谷田ら⁸⁾が夫婦間の相互性のタイプと不公平感との関連を検討することを目的とし、乳幼児を持つ妻 270 名に質問紙調査を実施した結果、夫婦間の相互性のタイプによって異なる次元が示された。ここでの相互性とは「自己と他者の心理的境界を保ちつつ、互いの関係を調整しながら、かかわること」と定義する。夫婦間の相互性の円滑群では、不公平感のさまざまな側面が現れていた。これは、不満が量的に多いというよりも、夫婦間の相互性を考えながら、生活全体を多面的に捉えているためと思われる。夫婦間の相互性の平均群では「家事や子育ての分担に関する不満」のみが含まれ、家事や子育ての分担をめぐった葛藤が多いことが示唆される。一方、夫婦間の相互性の維持困難群では、「夫の家事や子育てのスタンスに関する不満」との関連が見られ、夫の家事や子育てに関わる姿勢に不満を抱いている人が多かったと考えられる。この場合、「子どもの具合が悪いとき、女が休むべきだと思っている。」など、夫婦間でパワーバランスが関連している回答や、「家事が女ばかりに押し付けられてつくづく嫌になる。男が“偉い”と思い込んでいる。」などと、夫との関係において犠牲を強いられていると感じ

ていることがうかがえる。このことから、妻からみた夫婦間の相互性には、単に役割を平等に分担すればよいというのではなく、夫がそれをどう引き受け共有しているのかが重要だと思われる。単なる育児の分担の有無ではなく、互いの課題として理解できているかが乳幼児を持つ夫婦にとって重要だと言える。

谷田ら⁹⁾が母親から見た夫婦間の相互性が、地域ネットワークを介して、子育てに関する感情にどのように関連するのかを、就学前の子ども(0~6歳)を持つ母親 405 人を対象に質問紙調査と面接調査で検討した調査では、関係困難群に見られたように、夫婦間の相互性がうまく展開していない場合でも、保育所を基点とした関わりが心理的支えの補償となることが明らかになった。すなわち、地域ネットワークは相対的には大きな影響を及ぼさないかもしれないが、子育ては個人や夫婦だけではなく、さまざまな他者との関わりに基づいて体験されていることを示唆すると言える。このことから、家庭の関係性に困難さが認められる場合、地域の中での関わりというもう一つの可能性を、積極的に考慮する選択肢が見出された。しかし、この検討内容には父親からの観点が欠けているため、父親からの分析を検討し、新たに「夫婦」という一つの組での関わりを見ていく必要があると思われる。

数井ら¹⁷⁾が夫婦関係と子どもの発達状態の検討することで、家族システム的な立場より子どもの発達に関する考察することを目的として、質問紙法で母子 48 組を対象に調査を実施した。ここでいう家族システムを構成する主要因には、夫婦関係の調和性、育児ストレス、愛着の安定性の 3 つであり、夫婦関係の調和性とは「育児とは直接関係しない、日常生活上の諸領域で、夫との間でどのくらい協調的に生活を送られているか、という部分と、夫をパートナーとしてどの程度信頼し、

認めているのかという部分とを合わせたもの」と定義している。その結果、夫との関係が調和的に築かれていると認識している母親と、子どもの愛着が安定的に発達していることが関連していた。つまり、子どもの心的な発達に「親子」という直接的なかわり以外の、「夫婦」という親同士の関係の在り方が関わっていることが示されたと言える。また、親役割からのストレス要因からの関連では、子どもの心理的な状態が最も良くない状況は、母親にとって親役割のストレスが高く、かつ夫婦関係が良好ではない時だと予測された。逆に考えれば、夫婦関係が少くらい悪くても親ストレスが低ければ、子ども自身の発達への影響は、少なくともこの研究の一時点の状態としてはあまりないと受け取れる。本研究では母親に焦点を当てているのでパートナーである父親の実態を把握することはできないが、改めて母子を取り巻く一番身近な父親の積極的な育児参加、援助、協力が、親子間や家庭によりよい影響を与えていく上で必要不可欠だと言えるだろう。また、夫婦関係の調和性と親ストレスが負に相関していた結果から、例えば親役割を負担に感じたり、自分の生き方を模索しているような母親にとって、そのような自分を理解し、受け入れてくれる夫を持つか持たないかで、親ストレスの度合いが随分と変わってくることは然るべきことだと言える。また、夫婦関係が支援的に機能していない場合は、それに代わることのできる、母親の親役割ストレスに負けない方法を提示する必要が出てくるだろう。

同研究を家族システムの視点から考察すると、家族コミュニケーションがスムーズにとれ、家族の凝集性や柔軟性が適度に保たれ、家族に対する評価が肯定的であるという状態が、夫婦関係の良好さや親ストレスの軽減と関連しており、特に柔軟性は子どもの愛着の安定性とも関連している結果が見られた。つ

まり、そのまともは強制されたものではなく、状況に応じた可変的な部分を備えた状態であると言える。

3. 夫婦間の満足度

田中¹⁰⁾が夫婦関係満足度に着目し、出産後早期(以下0ヶ月とする)と6ヶ月の比較により実態を明らかにする目的で、初めて子どもを持つ両親73組146人を対象に調査したところ、夫からみた夫婦関係満足度ならびに妻からみた夫婦関係満足度が0ヶ月よりも6ヶ月には有意に低下していたことが明らかになった。小野寺¹¹⁾の先行研究では親になる前後における夫婦関係の変化を銃弾研究により検討しており、子どもの誕生によって親密性、すなわち夫婦二人だけの時の自由で和気あいあいとした親密な感情が低下することを報告しており、今回の研究の結果と一致していたと述べている。また、夫への親密性を低下させる妻側の要因として、夫の育児参加量の少なさを小野寺¹¹⁾は指摘しており、本研究でも妻からみた夫婦関係満足度の低下する6ヶ月は、妻が期待していたほど夫は育児行動を果たせていないという結果が得られている。このことから、親になってからの夫婦関係満足度は父親の育児参加の少ないことが関連しているためと考えられる。

また、同研究では6ヵ月後の母親の育児ストレスについても調査している。母親の育児ストレスに有意に関連していたのは、「父親の育児家事行動に対する母親の満足度」だけであった。その「父親の育児家事行動に対する母親の満足度」に関連していたのは、「父親の育児家事行動の自己評価」と「夫からみた夫婦関係満足度」であった。また「母親の評価した父親の育児家事行動」に関連していたのは「妻からみた夫婦関係満足度」であったという結果が確認された。これらにより、父親が夫婦関係に満足し、自分はよく育児家事を

していると思っっているほど、母親は父親の育児家事行動に満足している傾向が強く、満足の思いが母親の夫婦関係満足度を高めるが、いずれも母親のストレスとは関係しないということが言える。つまり、父親が育児家事に参加していると自分自身で思い、夫婦関係がよいと思っっていると、夫の家事行動への妻の満足度が高くなり、母親の育児ストレスが低くなることを提示している。これは、夫が実際に何をするかではなく、夫が育児家事という仕事を大変と思っ、夫なりに頑張って行っ、自分たちの夫婦関係がよいと思っっていると、母親の満足度が高くなり、母親は安定した心理状態で育児を行えるということを示している。こうした結果により、実際の育児家事行動の云々ではなく、夫婦間の対話の中で、父親のできる育児家事の具体的な役割分担や育児観の共有、さらに母親の育児上の課題や父親に求めている内容を明確にし、お互いの意思疎通を図っていくことが必要であると言える。また、日常生活での繰返される夫婦の対話の深まりの中で、信頼関係や夫婦関係の満足度が高くなり、そのことが夫婦で行う育児にもプラスに働いていくと推察される。また、育児に関しては、妻が夫も育児と一緒にしてくれていると感じられるように、父親の協力的な育児態度や夫婦のパートナーシップの育成を検討していく必要があると思われる。

渡邉ら¹⁾が公立保育園に通う0～4歳までの乳幼児を持つ両親の146組に対して、夫婦の対話状況と育児不安、育児の役割満足度との関連性を調査した。夫婦の対話時間で最も多かったのが「30分位」が30%、「1時間位」が29%でほぼ同割合であった。0～2歳児の母親を対象にした18年前の同様の調査¹²⁾では、1時間位が最も多く、次いで2時間位が27%であり、以前よりも夫婦の対話時間が少なくなっている状況にあることが推測され

た。これは現代の女性の社会進出などによる社会形態の変化も影響していると考えられる。また、夫の役割分担観別にみた夫婦の対話状況は、「夫婦主体」観を持つ群の方が「妻主体/夫補助」観を持つ群よりも有意に対話が長く、妻の役割分担観別、及びその分担観に対する夫婦間の一致・不一致と対話時間とは関連性を認めなかった。このことは、夫の育児に対する役割分担観が対話の機会や時間の長さにならなず影響していることが示唆された。そして夫との対話満足度が高い妻は、育児不安度も低くなり、育児に対する役割満足度も高くなることが明らかになった。このように対話を通して夫婦の意思疎通を図り、双方の役割分担についての認識を共有するということは、育児に対する夫婦間で連帯意識を育み、双方の育児の役割満足度を促し、育児不安の軽減に有用な機能を果たしていることが示された。

中谷ら¹³⁾が子育て期の夫婦の夫婦間の満足度が、育児不安や親意識にどのような関連があるのかを明らかにするために、2～4歳児と母親を対象として、週1回1年間の子育て支援プログラムを実施している支援施設に通所する母親とその配偶者78組を対象として調査した。その結果、妻の満足度が高いと、妻自身の育児不安は低く、親としての肯定的な意識が高いことが示された。またその場合、パートナーである夫も、親としての肯定感が高く、子どもへの関わりも良好であり、仕事と家庭における力配分においても、より家庭に重きをおく傾向があるといえたと示唆される。この結果は、先行研究で報告されている牧野¹⁴⁾の指摘である「父親の協力的な態度や意識が間接的に母親の育児不安に影響を与える」という内容や、中川¹⁵⁾の「夫の育児参加が高いほど、妻の夫婦関係に対する満足感が高い」という報告に見られる知見を改めて支持するものであることが示された。一方、

夫の夫婦間満足度と、ペアとなる妻の意識、夫自身の意識との関連についても検討を行ったところ、夫の満足度が高いと、夫自身の親としての肯定感が高く、父子関わりも良好であることが見出された。しかし、夫の満足度の高低とペアとなる妻の育児不安や親としての肯定的な意識、夫自身の家庭にかける力配分に関しては差異がなく、関連は見られなかった。このような結果から、妻の夫婦間満足度は、パートナーである夫の子育てに対する意識や行動の影響を受けやすいが、夫の夫婦間満足度は、妻に比べると、パートナーの子育てにおける意識や心理状態の影響をそれほど受けないと言える。つまり、夫の育児参加によって夫自身の夫婦関係に対する満足度は高まらないと示される。このような夫の夫婦間満足度の傾向に見られる要因として、仕事が挙げられる。本研究では、対象が専業主婦家庭がほとんどであったため、この仕事とう要因は妻側には存在しない。夫は仕事に専念で妻は家庭に従事するという夫婦の関係性が肯定的に受け止められていれば、仕事に専念できる環境を整えてくれる妻との間での満足度は高く、夫婦間で役割を分業しているため、妻の心理状態の影響を受けにくいことが考えられ、以上のような研究の限界があることを踏まえて結果を捉える必要がある。

さらに同研究で、夫婦間の満足度の一致度によって群分けされた4群(妻・夫共に夫婦間満足度が高い満足度HH群、妻・夫共に夫婦間満足度が低い満足度LL群、妻の夫婦間満足度が高く、夫の夫婦間満足度が低い満足度HL群、妻の夫婦間満足度が低く、夫の夫婦間満足度が高い満足度LH群)において、どのような傾向があるかを調査した結果、夫婦間の満足度の一致度によって、夫婦それぞれが持つ子育てに対する意識が異なることが推測される。満足度LL群は、夫婦間の満足度が低いために関係性において安定性に欠ける面があり、

夫婦共に子育てに対してあまり肯定的ではない意識状態で取り組んでいると考えられ、4群の中でも最も援助の必要性があると考えられる。夫婦間で不一致状態である満足度HL群は夫の子育てに対する意識が低く、満足度LH群は妻の子育てに対する意識が低く、育児不安が高いことから両群共に介入が必要ではあるが、一方が不満足であることにパートナーが気づいていないという認識のズレがあることから、介入する際には難しさがあると思われる。

斧出ら¹⁶⁾が、青年期の子どもが彼らの親の結婚満足度をいかに認知しているかを明らかにするため、大阪府下に所在する高等学校に通学する、1年生から3年生までの男女512名に自計式質問紙法で調査したところ、両親の結婚満足度を高く認知する子ども群においては、母親が無職、すなわち専業主婦であることが多く、そして家庭の生活程度を高く認知する子どもが多い。また、両親の夫婦間の役割関係に対する子どもの「期待」と両親の夫婦関係の「現実」とが一致している場合が多く、両親を夫婦として意識する頻度も高かった。調査データによれば、父親の職業、および家族形態と子どもの認知する両親の夫婦としての満足度の間には、直接的な関係はなかったものの、両者とも子どもが両親を夫婦として意識する頻度との間には相関があった。このような子どもの認知は、夫婦のあるべき姿に関する夫婦制家族イデオロギーが、子どもに深く内面化されていて、それが投影される形で、親の結婚満足度を認知しているように思われる。

・おわりに

先行文献の検討の結果、それぞれの観点で子育てにおける夫婦関係のあり方が示された。

ワーク・ライフ・バランスの観点では、夫婦が共働きであっても、生活の中でお互いに

よく理解し合えているという認知が高い傾向にあり。こうした夫婦間の理解は育児などといった生活の共同に大きく関連していた。また、父親がどの程度家庭生活に関与しているかという問題は、子育てにおける母親のマイナス的な感情に影響を及ぼしていた。今後は、夫婦や家庭を取り巻く社会環境の十分なワーク・ライフ・バランスへの理解と認識が問われてくると言えるだろう。

夫婦間のコミュニケーション・相互性の観点では、上辺だけのコミュニケーションの頻度ではなく、育児に従事する母親が父親からしっかり理解されているという実感が持っているかどうか、あるいは夫がどう引き受けお互いの問題として捉えてくれているかが、母親の育児不安の低下などの夫婦関係に良好な影響を与える原因となることが明らかになった。また、相手への理解といった行動による夫婦の相互理解は、子ども自身が抱く両親観に肯定的に作用することから、夫婦関係の良好さは子育てにおいて非常に重要であることが示唆された。ワーク・ライフ・バランスと同じく夫婦間の問題についても、周りの子育てにおける支援やサポート体制の状態によって母親のストレス低減に繋がり、子どもの発達への影響を抑えられることから、家庭以外のサポートによる影響を見据えた上で、夫婦の相互性についてさらに研究を深めていく必要があると考えられる。

夫婦間の満足度の観点では、子育てにおいては母親の場合、父親の育児不参加が負の影響を及ぼしていた。さらに育児参加にあたっては、父親が具体的な役割分担などの共有を妻と行い、子育てにおける夫婦の共通した認識があることが第一条件であることが示された。また、夫の育児に対する役割分担観が生活の中での対話時と関連していることから、夫の意識と妻の意識のズレを対話などの中で埋めていくことが必要であると思われる。し

かし、妻に比べて夫は、相手の子育てにおける意識や心理状態の影響を受けないという結果から、夫婦お互いの感じ取り方の違いを十分に考慮する必要がある。そうした夫婦の結婚満足度は子どもにも影響を与え、子ども自身が持っている夫婦像によって、子どもの夫婦の結婚満足度に対する認知は左右する。

今回、子育てにおける夫婦関係をテーマにさまざまな観点から調べた結果、改めて夫婦の間に存在する生活スタイルのあり方、それに対するお互いの共有された理解が心的に影響を及ぼすことが明らかにされ、特に外的な問題よりも、内的な夫婦間の一致によって外的な穴を補える可能性があることが示唆された。また、それは子どもの精神状態や、子ども自身が捉える夫婦満足度にも影響を及ぼし、夫婦から家庭という全体枠組みで捉えていく必要性が見られた。今回の先行文献では、対象の子ども年齢に差が見られたので、年代による子どもの受け止め方の差異も検討していくことが望まれる。また、家庭の外などの社会からのサポートという作用観点が重要になってくるだろうと思われる。社会の取り組みや制度なども時代の移り変わりで変動していくため、今を捉えると同時に未来のあるべき夫婦関係の構築を今後提示していくことが求められる。

〔引用・参考文献〕

- 1) 渡邊タミ子・樋貝繁香．(2004)．育児に対する夫婦の役割分担観とその役割満足度に関する研究．山梨大学看護学会誌，2(2)：37 - 44
- 2) (財)国立女性教育会館．(2006)．家庭教育に関する国際比較調査報告書：75 - 77
- 3) 木田淳子．(1985)．共働き夫婦における生活の共同と相互理解 保育園児のいる

- 家族の場合 . 大阪教育大学紀要第 部門, 34(2) : 103 - 117
- 4) 青木聡子 . (2009) . 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して . 発達心理学研究, 20(4) : 382 - 392
 - 5) 溝田めぐみ . (2002) . 夫婦関係と母親の育児態度 自由回答による分析 . 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 2 : 17 - 30
 - 6) 住田正樹 . 田中理絵 . 溝田めぐみ . (2000) . 夫婦間のコミュニケーションと育児不安 . 日本教育学会大会研究発表要項, 59 : 104 - 105
 - 7) 梶浦真由美 . 宮下美智子 . (1988) . 夫婦関係の子どもに及ぼす影響 夫婦間の共同・相互理解と子どもの両親・家庭観およびパーソナリティとの関連 . 大阪教育大学紀要第 部門, 37(1・2) : 41 - 56
 - 8) 谷田征子 . 青木紀久代 . (2007) . 乳幼児をもつ妻からみた夫婦間の相互性 夫婦間の相互性のタイプと不公平感との関連 . 心理臨床学研究, 25(4) : 408 - 418
 - 9) 谷田征子 . 青木紀久代 . (2009) . 母親からみた夫婦間の相互性と子育てに対する感情との関連 地域ネットワークに着目して . 心理臨床学研究, 27(2) : 152 - 162
 - 10) 田中恵子 . (2010) . 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性 . 人間文化研究科年報, 25 : 215 - 224
 - 11) 小野寺敦子 . (2005) . 親になることともなう夫婦関係の変化 . 発達心理学研究, 16(1) : 15 - 25
 - 12) 本村汎 . 磯田朋子 . 内田昌江 . (1985) . 育児不安の社会的考察 援助システムの確立に . 大阪市立大学生生活科学部紀要, 33 : 231 - 243
 - 13) 中谷祥子 . (2009) . 夫婦間の満足度と子育てに関する意識との関連 . 家庭教育研究所紀要, 31 : 169 - 176
 - 14) 牧野カツコ . (1985) . 乳幼児をもつ母親の育児不安 父親の生活および意識との関連 . 家庭教育研究所紀要, 6 : 11 - 24
 - 15) 中川まり . (2008) . 夫の育児・家事参加と夫婦関係 乳幼児をもつ共働き夫婦に関する一研究 . 家庭教育研究所紀要, 30 : 97 - 109
 - 16) 斧出節子 . 本村汎 . (1986) . 夫婦の結婚満足度と子どものパーソナリティ . 大阪市立大学生生活科学部紀要, 34 : 387 - 399
 - 17) 数井みゆき . 武藤隆 . 園田菜摘 . (1996) . 子どもの発達と母子関係・夫婦関係 幼児を持つ家族について . 発達心理学研究, 7(1) : 31 - 40
 - 18) 佐藤淑子 . (2011) . ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ夫婦の育児の協同 日本の中の多様性 鎌倉女子大学紀要, 18 : 15 - 26
 - 19) 尾形和男 . (2010) . 父親のワーク・ライフ・バランスについての一考察 夫婦関係、家族メンバーの生活、子どものワーク・ライフ・バランス観との関係 . 愛知教育大学研究報告, 59(教育科学編) : 99 - 106